



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『ルスランとリュドミーラ』における「目」の用法
Author(s)	安藤, 厚; 堀越, しげ子
Citation	北海道大學文學部紀要, 48(3), 37-53
Issue Date	2000-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33758
Type	departmental bulletin paper
File Information	48(3)_PL37-53.pdf



『ルスランとリュドミーラ』における「目」の用法

安 藤 厚
堀 越 しげ子

1

プーシキンが「文学における国民性について О народности в литературе」という題の短い文章で、ベストウージェフ、キューヘリベケルらの雑誌論文に対する返答の形で、「国民性 народность」をめぐる議論に加わろうとしたのは、1820年代半ばのことであった(1825-26)。そのなかでプーシキンは「作家における国民性というものは、同国人によってのみ完全に評価され得る徳性であって、異国の者にとっては存在しないか、あるいは欠点とさえ見られるものである。〈…〉気候風土、統治形態、信仰が各国民に特有の相貌を賦与しており、それは多かれ少なかれ詩の鏡に反映するのである。もっぱらある国民にだけ属する思考・感覚様式があり、あまたの風俗、伝統的信仰、習慣があるものなのである」(XI, 40)¹と、曖昧な定義しか与えていないが、同時期の彼の作品や、作品に対する批評への反論から判断すると、詩人にとって文学における「国民性」とは民衆性を意味していたと考えられる。

プーシキンの「国民性＝民衆性」への志向は、20年代半ばに突如現れた考えではなく、1810年代にすでにその萌芽が見られる。

まず、プーシキンは詩のなかに民衆の語彙を取り入れて詩を豊かにするという方法を、1810年代半ばのパラード論争の頃から意識していた。

パラード論争は、ドイツの詩人ビュルガーのパラード『レノーレ』のロシア語訳をめぐる生じた。1808年にジュコフスキーが『リュドミーラ』とい

う題名で原作よりも情緒的なロシア語訳によって紹介したが、1816年にカテーニンがより原作に忠実にかつ民衆語を取り入れて訳し直し、両者の訳をめぐって論争が起こった。²

1828年にプーシキンは「詩的語法について О поэтическом слоге」という未完の短い文章のなかで、イギリス詩人の民衆の語彙の取り入れ方の巧みさについて述べながら、ジュコフスキーとカテーニンの翻訳について次のように回想している。

「単調な芸術作品や、きまりきった洗練された限られた範囲の語彙に人々の心が飽きて、新鮮な民衆の空想や、初めは軽蔑されていた耳なれぬ俗語に方向を向けるという時代が、成熟した文学にもやって来ている。ひと頃フランスで快楽に飽きた社交界の人間たちがヴァデのミューズに夢中になっていたのと同じように、今やワーズワース、コールリッジが多くの人の注意を引きつけている。しかしヴァデには想像力もなければ詩的感覚もなく、彼の機知に富んだ作品には、商人や運び屋の野卑な言葉で表現された陽気さがあるだけだ。これに対し、かのイギリス詩人たちの作品は、実直な庶民の言葉で表現された深い感覚と詩想とで満たされている。〈…〉ジュコフスキーやカテーニンの試みはそれ自体としてではなく、それが生みだした効果のために失敗した。ヘーベルの翻訳の価値を理解した人は少なく、きわめて少なかったが、ビュルガーやサウジーの最良の作品とも並べて見られ得るバラッドである『殺人者』の力強さと独自性を理解した人はさらに少なかった」(XI, 73)

ここでは、民衆の要素を取り入れて作品を書いたドイツの詩人ヘーベルの作品のジュコフスキーによる翻訳が言及されている。トゥイニャーノフによれば、この翻訳でジュコフスキーは以前の情緒的・詩的な訳をやめて民衆の言葉をより多く取り入れたため、折衷主義者と批判されたのだった。³だがプーシキンはジュコフスキーを批判する立場には立たなかった。

バラッド論争の他にも、プーシキンを文学における民衆性の問題に向かわせた要因として、スタール夫人の『ドイツ論』を挙げることができる。スタール夫人は次のように書いている。

「あらゆる現代の詩のうちでもっとも古典的であるフランスの詩は、民衆の

間に流布しなかった唯一の詩である。タッソーのスタンスはヴェネチアのゴンドラの船頭達によって歌われている。スペイン人とポルトガル人はあらゆる階級の人が、カルデロンやカモエンスの詩を暗唱することができる。シェークスピアはイギリスの民衆によっても上流階級によっても同じように賛美されている。ゲーテやビュルガーの詩作品は音楽が付けられており、ライン川の岸辺をこだましバルト海まで伝わるその歌を耳にすることができる。我が国フランスの詩人達は、我が国とその他のヨーロッパの国々にあつて、洗練されたエスプリを持つ全ての人々に賛美されている。しかし彼らは、民衆や中産階級には、都市部においてさえ全く知られていない。なぜならフランスの芸術は、他の国におけるように、その美が発達した故国で生まれたのではないからだ」⁴

スタール夫人は古典主義的詩とロマン主義の詩を古代と近代、異教とキリスト教など、さまざまな対立する観点から捉えていた。ロマン主義を擁護する彼女は、フランスの国土に異質なものである古典古代の模倣を捨て、フランス固有の新たな文学の源泉を中世にさかのぼって見出し、国民文学を再生すべきであると主張した。上の引用から明らかなように、国民文学の再生とは、スタール夫人の考えでは、少数のエリートが吟ずる詩歌ではなく、国民の誰もが口ずさめるような詩を創ることを課題としていた。

スタール夫人の文章を読んだロシアの文学者たちの幾人かは——18世紀以降フランス語の導入によってロシアにおいても少数のエリートと一般大衆の文化が大いに関わり合っていたが——国民文学の創造のために民衆文化の側に歩み寄ろうとした。プーシキンがスタール夫人の『ドイツ論』を知ったのは、トマシェフスキーの意見に従えば、1817-19年頃であった。⁵

一方、プーシキンと同時代の批評家達は『ルスランとリュドミーラ』(1820)を「ロマン主義的物語詩」と評した。⁶ そのことはこの作品が押韻において「百姓風」⁷と批判されたことと無関係ではない。

このようにプーシキンはロマン主義の作品における民衆性の重要性を認識していた。

しかし『ルスラン』で彼が意図したのは、後のバラード(『花婿』1825年執

筆)や民話詩(『サルタン王物語』1831年執筆、『漁師と魚の話』1833年執筆、『死んだ王女と七人の勇士の話』1833年執筆、『金のにわとりの話』1834年執筆)におけるような、民話の語り直しではなかった。

『ルスランとリュドミーラ』は概して好意的に受け入れられた。〈…〉これが冷やかな作品であることには誰も気づかなかった(「批評を駁す Опровержение на критики」—XI, 144)。

上の引用でプーシキン自身が認めているように、『ルスラン』は一種の知的遊戯といえる。彼は魔法昔話や英雄物語、同時代の滑稽な物語詩やバラードそのものを創ろうとしたのではなく、それらを巧みに利用し、さまざまな文学的伝統と、伝統からの逸脱を描くことによって、笑いを生み出そうとしたのだ。

そのことを示す一つの例として、本稿では『ルスランとリュドミーラ』における「目 очи/глаза」の用法を検討する。

分析にあたっては、インターネット上に公開されている電子データをもとにコンコーダンスを作成し、関係語彙の全用例を検討した。⁸

2

『ルスランとリュドミーラ』では、очи と глаза が、作品の内容に関連して、対照的な用いられ方をしている興味深い。

現代語では、очи はことわざや、ある決まった表現でのみ使用され、視覚の器官としての「目」の意味では глаза が用いられるが、『ルスラン』が書かれた19世紀初頭にはどのような文体上の価値を担っていたのだろうか。『教会スラブ語ロシア語辞典』(1847)⁹によれば、очи には очеса というバリエントもあり、教会スラブ語の文献で使用される語彙だった。

それではプーシキンの作品では、очи は主にどのジャンルで使われているのだろうか。プーシキン辞典を見ると、очи は叙情詩における使用が圧倒的

に多く、それ以外の作品での使用は少ないことがわかる。一方 глаза は очи と比較すると、明らかに叙情詩での使用が少なく、それ以外の作品での使用が多い。しかし『ルスラン』では、プーシキンの他の叙事詩の作品とは違い、очи が多用されている。以下、そのことの意味を探る。

まず作品中で очи, глаза が誰の目を指すのかを調べると(【表1,2】参照), 他の視覚を表す語(例えば взор)とは違って, очи の場合はその所有者が限定されていることがわかる。

作品中で очи の使用回数をもっとも多い人物はルスランで, 全体の三分の一以上を占める。次にリュドミーラが続く, ルスランの半分の回数である。

ルスラン, リュドミーラに очи が使われている箇所をテキストに照らして見ると(【表3】参照), 次のことがわかる。ひとつは, この物語詩はさまざまなエピソードを持ち, 量的にも大きなものだが, очи の使用は極く限られた

【表1】 очи の所有者 (用例総数：23)

人物	用例数
ルスラン	8
リュドミーラ	4
生ける頭 (第三歌, 第五歌)	3
若く美しい娘たち (第四歌・語り手の言葉)	1
ラトミールを誘惑する, 城に住む若い娘達	1
ラトミールが城を捨てたあとに共に暮らすようになった娘	1
フィンの翁	1
キエフの民	1
兵士達	1
ルスランの乗っている馬	1
語り手の親友たち (第三歌・語り手の言葉)	1

【表 2】 глаза の所有者（用例総数：9）

人物	用例数
ナイーナ	2
生ける頭	2
ルスラン	1
リュドミーラ	1
フィンの翁	1
ルスランの乗っている馬	1
クリュメネー（第三歌・語り手の言葉）	1

【表 3】 ルスラン、リュドミーラに очи の使用される場面（用例総数：12）

場面	人物	用例数
①冒頭の婚礼の場面	リュドミーラ	1
②フィンの翁との最初の出会いの場面	ルスラン	2
③古戦場を見て詩を吟じる場面	ルスラン	1
④ルスランに化けたチェルノモールの企みにリュドミーラが引っ掛かる場面	チェルノモール＝ルスラン リュドミーラ	1 1
⑤魔法で眠っているリュドミーラを、ルスランがチェルノモールの館で見つけだす場面	ルスラン リュドミーラ	2 1
⑥キエフへ帰る旅の途中で眠っているリュドミーラをルスランが見つめる場面	ルスラン	1
⑦フィンの翁の力でルスランが生き返る場面	ルスラン	1
⑧ルスランが魔法の指輪でリュドミーラに触れ、眠っていたリュドミーラが目覚めます場面	リュドミーラ	1

場面にのみ見られるということである。また、それらの場面でルスランは常にフィンの翁、ないしリュドミーラと一緒にいることも明らかになる。例外として③の古戦場の場面が挙げられるが、ここではルスランが詩的感慨にふけているためと考えられる。一方リュドミーラの側から *очи* の使用を見ると、それはルスランと一緒にいる場面に限定される。

ルスラン、リュドミーラに関して *очи* がこのように限定して使用されている理由は次のように考えられる——物語詩全体を通じてどの場面でも常に二人に *очи* が使われているわけではない。*очи* の使用は魔法昔話の要素と関わりがある。この物語詩にはしばしば魔法昔話の要素が登場するが、それらの場面で二人はいわば魔法昔話の主人公となるのである。*очи* は、魔法昔話の主人公にとっては定番といえる、美しいお姫様と王子様という組み合わせの場面でのみ使われているといえる。

逆に、魔法昔話にはふつう見られない場面（例えば、リュドミーラがさらわれの身を嘆き、飢えて死ぬ決意をした後、空腹をこらえ切れず、差し出された昼御飯を食べてしまう場面など）では、*очи* の使用はない。この場合、魔法昔話という枠も作者のパロディーの対象になっていると考えられる。

その他、ルスランには *глаза* の使用例も一つあるが、これは音韻上の理由によると考えられる。

Руслан с нее не сводит глаз,
Его терзает вновь кручина...
Но вдруг знакомый слышит глас,
Глас добродетельного Финна.

ルスランは彼女に目をこらす
悲しみが再び彼を引き裂く……
だが不意になじみの御声がきこえる
あの徳高きフィンの翁の御声が。

(IV, 64-65)

ここの *глаз* は複数生格で、もし *очи* の複数生格 *очей* を使うとすれば、二音節が必要となる。また *глас* (声) と脚韻を踏むためには *глаз* の方が適している。さらに、この *глас* はフィンの翁の「御声」であり、*голос* ではなく *глас* であること、つまりある荘重さをもつ言葉と韻を踏んでいることが、*глас* の

二度の繰り返しによって強調されている。

リュドミーラについても一度だけ глаза が使用されている。チェルノモールにさらわれ、その館に閉じ込められたリュドミーラが、夜になって彼の来室を恐れ、眠れなくなる場面で、「Мгновенный сон от глаз бежит 束の間の眠りが目から走り去ってゆく」とある。これも音韻上の問題のためと考えられる。音節の数に注目すると、очей を使えば二音節が必要だが、глаз なら一音節ですむ。

リュドミーラをはじめとする若く美しい女性の登場人物に、語り手は очи を使用している。

Но есть волшебники другие,
Которых ненавижу я:
Улыбка, очи голубые
И голос милый — о друзья!
Не верьте им: они лукавы!

しかし別の魔法使い達も存在する、
その人たちは私は嫌っている。
微笑み、空色の目
そして優しい声 — ああ親友たちよ！
彼女達を信じてはいけない、狡猾なのだ！

(IV, 50)

И юный хан уж под стеною;
Его встречают у ворот
Девы красные толпою;
При шуме ласковых речей
Он окружен; с него не сводят
Они пленительных очей;

そして早くも若き汗は城壁の下に立つ。
彼を城門のところで迎えるのは
群がりよる美しき乙女たち。
愛想のよい話し声のざわめきに
彼はとりまかれる。彼女達は
魅惑的な目を彼から離そうとはしない。

(IV, 53)

Из темной хаты выбегает
Младая дева; стройный стан,
Власы, небрежно распущенны,
Улыбка, тихий взор очей,
И грудь, и плечи обнажены,
Всё мило, всё пленяет в ней.

暗い小屋の中から走り出てくる
若い乙女が。すらりとした体つき
ぞんざいにほどかれた髪、
微笑み、静かな目つき、
そして胸、そしてむきだしの肩、
彼女の全てが愛らしく、人を魅了する。

(IV, 69)

これは、語り手の言葉にもあるように、女性は「魔女」である、つまり男性にとって「素晴らしい」存在であると同時に「毒」でもあるような謎めいた存在と捉えられていることによる。

確かに、語り手はリュドミーラについて「はすっぱな ветрена」という表現を使っている。しかしそのためにリュドミーラはいつそう愛らしい存在なのである。

Ах, как мила моя княжна!
Мне нрав ее всего дороже:
Она чувствительна, скромна,
Любви супружеской верна,
Немножко ветрена... так что же?
Еще милее тем она.
Всечасно прелестью новой
Умеет нас она пленить;

ああ、私の公女はなんと愛らしいこと！
彼女の気性は何にもましていいとおしい。
彼女は情深く、慎み深く、
夫婦の愛に忠実である、
ほんの少しはすっぱだが……それがなんだ。
そのためにいつそう愛らしい。
いつも新しい魅力をもって
彼女は我々を虜にすることができる。

(IV, 60)

リュドミーラは「はすっぱ」である以上、謎めいた存在ではない。しかし、それでもなお語り手がリュドミーラを魅力的と考え、彼女の魅力を「新しい魅力」と名付けていることに注目する必要がある。

このリュドミーラ像は、ルーシの気高い王女の姿とは少しずれている。このずれは作品全体に深く浸透したパロディーの問題と結びついている。語り手はこのずれを利用して新しい魅力を創り出したのだ。

生ける頭の場合は、очи が三回、глаза が二回使用されているが、第三歌、ルスランとの初めての出会いの場面で очи と глаза の両方が使用されているのは、脚韻など音韻上の理由によるのではない。例えばルスランが何か恐ろしいものとして生ける頭を荒野に見つけたとき、очи が使われている。

Пред ним живая голова.
Огромны очи сном объять;
Храпит, качая шлем пернатый,

彼の前にあるのは生ける頭である。
その巨大な目は眠りに包まれている。
羽飾りの兜をゆすりながらいびきをかき

И перья в темной высоте,	暗い頂にある羽毛は
Как тени, ходят, развеваясь,	影のようにためき動いている。
В своей ужасной красоте	その恐ろしい美しさに包まれ
Над мрачной степью возвышаясь,	暗い荒野の上にそびえつつ
Безмолвием окружена,	沈黙に取り囲まれたまま
Пустыни сторож безымянной,	荒れ野の名もわからぬ番人は
Руслану предстоит она	ルスランの前に立ちはだかる
Громадой грозной и туманной.	巨大な恐ろしい霧につつまれた姿となって。

(IV, 43)

これに対し、ルスランがいたずら心を起こして生ける頭の鼻を槍でくすぐる場面では、 глазаが使われている。

В недоумении хочет он	どうしていいのかわからずに彼は
Таинственный разрушить сон.	この不思議な眠りを破ろうとする。
<...>	<...>
И стал пред носом молчаливо;	そして何も言わずに鼻の前に立った。
Щекотит ноздри копием,	槍で鼻の穴をくすぐる
И, сморщась, голова зевнула,	するとしわを寄せて頭はあくびをして、
<u>Глаза</u> открыла и чихнула...	目を開けてくしゃみをした……

(IV, 44)

鼻の穴をくすぐられた頭は、あくびをして目を開き、くしゃみをする。「あくびをした」と「くしゃみをした」は韻を踏んでおり、滑稽な雰囲気を出している。

一方、激怒した頭とルスランが戦う場面では再び очи が使用されている。

Тогда, от ярости немея,	すると激しい怒りで口もきけず
Стесненной злобой пламенея,	息詰まる敵意に燃えながら
Надулась голова; как жар,	頭はふくれあがった。炭火のように
Кровавы <u>очи</u> засверкали;	血走った目がぎらぎらと輝きだした。

(IV, 44-45)

つまり、生ける頭の場合も、恐ろしい美しさをたたえた神秘的な存在として登場する場面と、ルスランにからかわれる滑稽な場面とで *очи* と *глаза* の使い分けがなされているといえる。

フィンの翁に関して *очи* が使われるのは、次のような場面である。フィンの翁が長年の片思いの相手ナイーナを、魔法を使って呼び寄せる。しかしナイーナは年をとって醜い老婆に変わっており、彼の恋心はすっかり冷めてしまう。だが彼は自分のかけた魔法のためにナイーナに追いかけ回される。

И вдруг сидит передо мной
Старушка дряхлая, седая,
Глазами вpalыми сверкая,
С горбом, с трясучей головой,
Печальной ветхости картина.
Ах, витязь, то была Наина!..
Я ужаснулся и молчал,
Глазами страшный призрак мерил,
В сомненьи всё еще не верил
И вдруг заплакал, закричал:
Возможно ль! ах, Наина, ты ли!

そして不意にわしの前に座っている
白髪のおいさびた老婆が
落ちくぼんだ目を光らせて
腰はまがり頭はふらついている、
みじめな老衰をそのまま絵にしたよう。
ああ、騎士よ、これがナイーナだった！
わしはぞっとしておし黙った
この恐ろしい幻をじろじろ見回した
疑念にとらわれまだ信じられなかった。
そして突然声をあげて泣き、叫んだ。
そうなのか！ああ、ナイーナよ、お前なのか！

(IV, 18)

И между тем она, Руслан,
Мигала томными глазами;
И между тем мой кафтан
Держалась тощими руками;
И между тем — я обмирал,
От ужаса, зажмуря очи;
И вдруг теперь не стало мочи;
Я с криком вырвался, бежал.

そう言いながらも、ルスランよ、彼女は
悩ましげな目で目くばせするのだ。
そう言いながらもわしのカフタンに
やせた手をかけようとしたのだ。
そのあいだにもわしは目を細め
恐怖に気が遠くなりそうだった。
そして突然耐えられなくなった。
わしは叫び声をあげ逃げ出した。

(IV, 20)

この再会の場面では *очи* だけでなく *глаза* も使われているが、*глаза* の使

用こそが、この場の滑稽な内容に沿った、この場の規準と思われる。一方、ここで очи が使われたのは、音韻上の理由のためと考えられる。脚韻を見ると、очи はここでは мочи と韻を踏んでいるが、別の箇所でも、мочи を含む一行と脚韻を踏んでいるからだ。

И вдруг она, что было мочи,
Навстречу князю стала дуть;
Напрасно конь, зажмуря очи,
Склонив главу, натужа грудь,
Сквозь вихорь, дождь и сумрак ночи
Неверный продолжает путь;

すると突然頭は力の限り
公に向かって息を吹きかけ始めた。
むなしく馬は目を細め
頭を下げ、胸をびんと張り、
突風と雨と夜の間をついて
頼りない足取りで歩き続ける。

(IV, 45)

キエフの民に関しては、リュドミーラが魔法をかけられ、眠った状態で連れ戻されたという知らせに、市民は興奮して夜も眠れないという場面で使われている。

Настала ночь. Никто во граде
Очей бессонных не смыкал;
Шумя, теснились все друг к другу;
О чуде всякой толковал;

夜が訪れた。町じゅうの誰もが
眠れぬ目を閉じようともせず
互いに身をすり寄せてざわめいていた。
誰もが不思議な出来事の話をしていた。

(IV, 79)

兵士達に関しても очи が使われている。

За горами кровавых тел
Бойцы сомкнули томны очи,
И крепок был их бранный сон;
Лишь изредка на поле битвы
Был слышен павших скорбный стон
И русских витязей молитвы.

血まみれの死体の山のかげで
兵士達は疲れきった目を閉じる
彼らの戦場の眠りは深い。
戦いの野にごくまれに聞こえてきた
倒れた者達のいたましいうめき声と
ロシアの勇士達の祈りの声が。

(IV, 82)

この場合、очиの使用は、キエフ市民が置かれている非日常的な状況、すなわち公女の不幸と突然襲ってきたペチェネグ人との戦闘によるものと考えられる。

* * *

以上検討してきたように、『ルスランとリュドミーラ』でочиとглазаは所有者が限定され、使い分けられている。очиは主に、ルスランとリュドミーラが物語の主人公として共に登場するときなどに限り使われている。生ける頭の場合は、頭の超自然的な存在を示すときにочиが使われている。そのほか戦争の勃発など非日常的な状況を述べる場面でもочиが用いられている。一方глазаは、生ける頭がいたずらされたり、長年の恋の相手と呼び出すと老婆が現れるなど滑稽な場面で用いられている。このように、очиとглазаの使い分けは作品の内容と深く関わっている。

さらにочиはその所有者が魔法昔話などの文学的伝統にのっとった人物として描かれるときに使われ、глазаは所有者がそうした文学的伝統から外れて描かれるときに使われると仮定できるかもしれない。しかしこれについては、очиとглаза以外の語彙についてもさらに検討すべきであり、今後の課題としたい。

注

- ¹ プーシキンの作品からの引用は *Пушкин А. С. Полн. собр. соч. М.; Л.: Изд-во АН СССР, 1937-1959* により、() 内に巻号、頁数を記す。翻訳は、『ルスラン』「批評を駁す」は堀越により、川端香男里訳（『プーシキン全集』1，河出書房新社，昭和48年，347-507頁；5，61頁）を参照した。「文学における国民性について」「詩的語法について」は、川端香男里訳（『プーシキン全集』5, 29, 43-44頁）を借用した。
- ² バラード論争については、栗原成郎「『死んだ花婿が花嫁を連れ去る』話」、『スラヴ学論叢』2（1997）：4-39を参照。
- ³ *Тынянов Ю. Н. Архаисты и Пушкин // Тынянов Ю. Н. Архаисты и новаторы. Прибой, 1929 (Ann Arbor: Ardis, 1985). С.107-112.*

- ⁴ *Mme de Staël*. De l'Allemagne. Paris: Ernest Flammarion, 1968 (Reprint). T. 1. P.177.
- ⁵ *Томашевский Б. В.* Пушкин и Франция. Л.: Советский писатель, 1960. С. 20.
- ⁶ *Воейков А. Ф.* 《Руслан и Людмила》, соч. Александра Пушкина//Пушкин в прижизненной критике: 1820-1827. СПб.: Гос. Пушкинский театральный центр, 1996. С. 38; *Измайлов А. Е.* 《Руслан и Людмила》. Поэма в шести песнях. Соч. А. Пушкина//Там же. С. 74.
- ⁷ *Воейков А. Ф.* 《Руслан и Людмила》... ; *Измайлов А. Е.* 《Руслан и Людмила》... ; *Кайсаров М. С.* Скромный ответ на нескромное замечание г. К-ва//Там же. С. 87.
- ⁸ テキストデータは、インディアナ大学の George Fowler 教授 (gfowler@ucs.indiana.edu) のコーパスに Peter B. Stetson (stetson@dao.nrc.ca) が寄付した『ルスラン』の電子テキストをもとに、堀越がアカデミー版プーシキン大全集に沿って修正したもの。コンコーダンスの作成には、OCP (Oxford Concordance Program) を利用した。
- ⁹ *Словарь церковно-славянского и русского языка*. СПб.: Императорская Академия Наук, 1847 (Tokyo: Nisso Tosho, 1989).

* 本稿は平成 10 年度リサーチ・アシスタント (RA) 経費による研究プロジェクト「19 世紀前半のロシア小説の文体の計量的研究」(研究代表者: 安藤厚) の成果の一部である。プロジェクトの立案は安藤が、技術面の指導は浦井康男が行い、本論文の執筆は堀越が担当した。原稿は、平成 10-11 年度科学研究費補助金による共同研究「18-20 世紀ロシア小説の文体の計量的・総合的比較研究」(研究代表者: 灰谷慶三; 課題番号: 10410106) の平成 10 年度研究会 (1999 年 2 月 17-18 日, 北大文学部) で発表したものを、さらに補足・改訂した。

Ацуси АНДО
Сигэко ХОРИКОСИ

Контрастное употребление слов «очи» и «глаза» в «Руслане и Людмиле» Пушкина

В середине 20-х годов XIX в. в среде молодых литераторов возник интерес к понятию народности в литературе. Пушкин решал эту проблему путем эксплуатации элементов народной культуры. Обращение Пушкина к народному творчеству было вызвано полемикой вокруг перевода произведения немецкого поэта Бюргера «Леноре» Жуковским (1808) и Катениным (1816), а также появлением книги М. де Сталь «О Германии», в которой была изложена теория романтизма.

Мы считаем, что во время написания «Р. и Л.» (1820) Пушкин еще не относился к произведениям народного творчества, как к серьезному литературному источнику, — перелом в этом плане наступил после 1820 г. Позже Пушкин сам признавал, что «Р. и Л.» — это «холодная игра». Поэт стремился не просто пересказать волшебные сказки, а создать произведение, пронизанное иронией, построенное на сочетании литературной традиции с элементами новаторства.

Чтобы доказать это положение, мы предлагаем рассмотреть контрастное употребление слов «глаза» и «очи» в «Р. и Л.». При участии профессора Урай на основе методики компьютерного анализа текста нами был составлен контекстный словарь употребления вышеназванных слов с указанием того, к кому из героев они относятся.

Было установлено, что слово «очи» относится к ограниченному кругу лиц и употребляется, главным образом, при описании Руслана, когда он появляется на сцене вместе с другими действующими лицами, которые, так же, как и он, являются героями волшебных сказок и т. п.

В то же время, слово «глаза» употребляется при описании героев комических, с новаторскими отступлениями от литературной традиции.

Мы выдвигаем предположение, что контрастное употребление слов «очи» и «глаза», другими словами, противопоставление славянизма и русизма играет особенную и существенную роль в художественной системе «Р. и Л.». Но чтобы доказать это предположение, требуется дальнейший анализ контрастного употребления подобных слов.

Употребление слов «глаза», «очи» и «взор» в «Р. и Л.»

	глаз 2	Номер песни и строки
темнеет; /Мгновенный сон от глаз бежит; /Не спит, удвоила внимань		2 414
ет. /Руслан с нее не сводит глаз, /Его терзает вновь кручина...		5 177
	глаза 2	
Климена, /Потупишь томные глаза, /Ты, жертва скучного Гимена...		3 019
сморщась, голова зевнула, / Глаза открыла и чихнула... /Поднялся		3 255
	Глазами 3	
/Старушка дряхлая, седая, / Глазами впалыми сверкая, /С горбом, с		1 446
!.. /Я ужаснулся и молчал, / Глазами страшный призрак мерил, /В с		1 451
на, Руслан, /Мигала томными глазами; /И между тем за мой кафтан /		1 498
	глазах 2	
ще родился, /И в умирающих глазах /Последний гнев изобразился. /		5 282
кнув гордой головою, /В его глазах исчез огонь! /Не машет гривой		6 042
	очам 2	
ает руку. /Светлеет мир его очам, /И сердце позабыло муку. /Вновь		1 273
юдмила! /Не веря сам своим очам, /Нежданном счастьем упоенный,		5 167
	очами 4	
руг себя /Взирает грустными очами. /«О поле, поле, кто тебя /Усея		3 177
же миг /Зрит колдуна перед очами. /Раздался девы жалкий стон, /П		4 320
крылами. /На деву смутными очами /В дремоте томной он взглянул /		5 452
тает Руслан, на ясный день / Очами жадными взирает, /Как безобраз		6 197
	очах 2	
дка, стан; /Но бледен он, в очах туман, /И на бедре живая рана —		4 307
ный князя хлад объемлет, /В очах его темнеет свет, /В уме возникл		5 134
	очей 4	
крылись /От гневных зависти очей. /Уж бледный критик, ей в услугу		3 004
не сводят /Они пленительных очей; /Две девицы коня уводят; /В чер		4 102
щенны, /Улыбка, тихий взор очей, /И грудь, и плечи обнаженны, /В		5 336
стала ночь. Никто во граде / Очей бессонных не смыкал; /Шумя, тес		6 135
	очи 10	
глядят на молодых: /Невеста очи опустила, /Как будто сердцем приу		1 091
обмирал, /От ужаса, зажмуря очи; /И вдруг терпеть не стало мочи;		1 502
имал /Рассказы старца: ясны очи /Дремотой легкой не смыкал /И ти		1 531
ним живая голова. /Огромны очи сном объаты; /Храпит, качая шлем		3 238
ь голова; как жар, /Кровавы очи засверкали; /Напелясь, губы задро		3 286
ть; /Напрасно конь, зажмуря очи, /Склонив главу, натужа грудь, /С		3 291
оторых ненавижу я: /Улыбка, очи голубые /И голос милый — о друзь		4 011
но дева дремлет, /Сомкнуты очи и уста, /И сладострастная мечта /		5 174
тел /Бойцы сомкнули томны очи, /И крепок был их бранный сон; /Л		6 272
, /Вздохнув, открыла светлы очи! /Казалось, будто бы она /Дивилас		6 350
	оком 1	
удес; /Она глядит недвижномоком; /Власы ее как черный лес, /Поро		5 259

взор 26

лодая, /Огня надежды полон взор; /То скачет он во весь опор, /То 1 201
 льше беспокоен он, /И часто взор его ужасный /На князя мрачно уст 1 210
 ареч; ясный вид, /Спокойный взор, брада седая; /Лампада перед ним 1 239
 битель /Не проникал донине взор; /Но ты, злых козней истребитель 1 264
 пламень роковой /За дерзкий взор мне был наградой, /И я любовь уз 1 334
 аданье! /Я трепетал, потупя взор; /Она сквозь кашель продолжала / 1 487
 а? /Увижу ль я твой светлый взор? /Услышу ль нежный разговор? /И 2 133
 ного чела. /За нею, скромно взор склоняя, /Потом прибилжилась др 2 242
 окну решетчату подходит, /И взор ее печально бродит /В пространст 2 276
 м небесам. /Вдруг осветился взор прекрасный; /К устам она прижала 2 341
 ор; /Но их унылый, смутный взор /И принужденное молчанье /Являл 2 399
 ь не смеет; /Хладуют перси, взор темнеет; /Мгновенный сон от глаз 2 413
 цу внятный; /Ты покраснела, взор погас; /Вздохнула молча... вздох 3 023
 остель оставила Людмила /И взор невольный обратила /К высоким, ч 3 115
 убится; /Потупя неги полный взор, /Прелестные, полунагие, /В забо 4 119
 стным желаньем; /Бродящий взор его блещит, /И, полный страстны 4 135
 ; /Руслан подьмет смутный взор /И видит — прямо над главою — 5 038
 аходит; /Кругом смущенный взор обводит — /Всё мертво: рощицы м 5 127
 ханье, /Огромный закатился взор, /И вскоре князь и Черномор /Узр 5 292
 распущенны, /Улыбка, тихий взор очей, /И грудь, и плечи обнаженн 5 336
 зговор /И, устремив на хана взор, /И улыбалась и вздыхала 5 399
 з воспаленных ран. /Поутру, взор открыв туманный, /Пуская тяжки 5 531
 ала; /Но иногда свой нежный взор /Нежнее на певца бросала... /Реш 6 028
 чих, /Куда и ведьмы смелый взор /Проникнуть в поздний час боится 6 163
 ный? /Там, устремив на нивы взор, /Народ, уныньем пораженный, /Ст 6 233
 слана, /В нем кровь остыла, взор погас, /В устах открытых замер г 6 341

взора 1

стекла /Вздыхая не сводила взора, /И девице пришло на ум, /В вол 3 126

взором 2

Со взором, полным хитрой лести, /Ей карл 3 060
 х скал /Тихонько проезжал и взором /Ночлега меж дерев искал. /Он 4 065

взоры 2

боду горьким дав слезам, /И взоры мрачные возводит /К неумолимы 2 339
 ла дар /Обворожать сердца и взоры; /Ее улыбка, разговоры /Во мне 5 012